

2022年8月28日 佐土原キリスト教会 礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書 10章 17～31節

説教題：自由にされて

「平和を願う祈り」という祈りがあります。「主よ、私を、あなたの平和の道具として用いてください。憎しみのあるところに愛を、争いのあるところに和解を、分裂のあるところに一致を、疑いのあるところに真実を、絶望のあるところに希望を、悲しみのあるところに喜びを、暗闇のあるところに光を、もたらすことができますように、助け導いてください。主よ、私に、慰められるよりも慰めることを、理解されるよりも理解することを、愛されるよりも愛することを、望ませてください…。私達が「憎しみのあるところに愛を、争いのあるところに和解を…」もたらす器となることが出来れば、どんなに素晴らしいでしょうか。この祈りは、聖フランシスコという人が祈った祈りです。聖フランシスコは、13世紀にイタリアのアッシジの町の裕福な商人の息子として生まれました。贅沢な生活を楽しんでいた人です。しかしある時、ローマへの巡礼の旅に出た時、乞食の苦しみを見て、心を動かされて、乞食の服と自分の服を取り替えて、自分もしばらく乞食をしたと言われます。その経験が彼に大きな影響を与え、やがては、本当に全てを捨てて、貧しい人々（特にハンセン病の患者）に仕えるような働きを始めるのです。彼はイエス様の言葉：「行って『天の国は近づいた』と宣傳伝えなさい。病人を癒し、死者を生き返らせ、重い皮膚病を患っている人を清くし、悪霊を追い払いなさい。ただで受けたのだから、ただで与えなさい。帯の中に金貨も銀貨も銅貨も入れて行ってはならない。旅には袋も二枚の下着も履物も杖も持って行ってはならない…」（マタイ 10:7～10）を自分への呼びかけとして受け取り、この言葉を生きて行ったのです。そして当時のハンセン病患者が着ていた服と同じような服を着て、靴もはかず、赤貧を生きつつ神に仕えます。やがて彼の回りに、彼の姿に動かされた人々が集まり、現在に至るフランシスコ会という修道会が生まれるのです。なぜ彼は、富の全てを捨てて、そのような生活に入ったのか。1つには、今日の聖書箇所の「21節に倣った」と言う人もいますが、いずれにしても「自分がイエス様に従うために妨げになっているのが富だ」と理解したのだと思います。だから「自分を地に縛り付けている富から—（全てのことから）—自由になろうとした。自由になって主イエスに従おうとした」のではないのでしょうか。

今日の箇所—（特に21節）—を皆さんはどのように受け止められるのでしょうか。カトリック教会には、聖フランシスコのように全ての私有財産を放棄して、聖職者になったり、修道院に入ったりして、このイエスの御言葉に応答しようとする人々が今でもいます。聞きかじりですが、カトリック教会では「そういうことの出来る特別な人々がいて、その人々にこの言葉は語られている、一般の信者はその高德に感謝して、それにすぎるのだ」とこの御言葉を理解しているそうです—（今もそうかは分かりません）。一方プロテスタント教会は、全ての信者にこの言葉が語られていると理解します。では、私達はこの箇所をどう理解し、どのようなメッセージを受け取れば良いのでしょうか。「内容」と「適用」、2つに分けてお話し致します。

1. 内容～「主イエスに従うことへの招きを拒否する」

「イエス様とこの金持ちの男の会話」は物別れに終わるわけですが、何が問題だったのでしょうか。彼は「永遠の命を自分のものとして受けるためには、私は何をしたらよいのでしょうか」（17）とイエス様に問うて来ました。彼は「永遠の命」を求めていました。私達もそうではないのでしょうか。私は鬱で入院している時、誰を見ても「この人もいずれ死ぬんだ」とそんな風にしか感じられなかったことがあります。人生というものが非常に虚しく思えました。今はそうでもありませんが、やはり「永遠の命」というものがなければ、人生は間違いなく死に向かって行く、しかもその中で、「喜び」もありますが、悩んだり、苦しんだり、悲しんだりしながら歩いて行くのです。何のために生きて行くのか。もしこの世界を超えた「命」が待っているのであれば、人生は虚しいと思います。彼は「人生に死が待っていること」を意識していました。そして「永遠に生きたい、死に勝たいたい」と思ったのです。

そしてその道を知りたいと願ったのです。

彼は「永遠のいのちを自分のものとして受けるためには…」と語っています。「新共同訳」は「受け継ぐには…」と訳しています。親から財産を分けてもらうように、『永遠の命』は神から分けて頂くより他には無い」ということを意識しているのです。その「分けて下さる方をイエスは知っているに違いない」と思った。だから聞いて来たのです。彼は「何かをすることによって—(具体的には『律法を守ること』によって)—それを手に入れようと—(神からもらい受けようと)—していました」。一生懸命に律法を守ったのでしょう。しかし「永遠の命を受けられる」という確信がない。それで「後、何をすれば良いのか」と教えを請うたのです。

ここで不思議なのは、イエス様が「戒めはあなたもよく知っているはずです。『殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証を立ててはならない。欺き取ってはならない。父と母を敬え』(19)と語っておられることです。私達は「永遠の命を頂くこと—(『神の国に入ること』と言い換えても良い)—それは、何かをすることによって手に入れるものではなく、ただイエス様を信じて、神の恵みに信頼して、『神様、こんな者ですけど受け入れて下さい』と身を低くして神を見上げる、それしかない」と教えられて来ています。それなのに、ここでは、まるでイエス様が「律法を守れば永遠の命を手に入れられる」と語っておられるような感じでした。これをどう考えれば良いのでしょうか。

ここでイエス様が言われた戒めは「モーセの十戒」の一部ですが、いずれも「隣人との関係」について命じられている戒めをピックアップしておられます。後に「ローマ書」でパウロが「どんな戒めがあっても、それらは『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』という言葉の中に要約されている」(ローマ 13:9)と語りますが、イエス様はその基になるような信仰を語られるのです。それは、その人の神への姿勢、神との関係は、具体的には隣人との関係に出て来るからでしょう。だから「永遠の命を求める者」としての彼の生き方を、イエスは見ようとされたのだと思います。「永遠の命」が神から頂くものであるとすれば、神との正しい関係を求めることなしには、それはあり得ません。それに対して彼は「そのようなことをみな、小さい時から守っております」(20)と答えます。21節に「イエスは彼を見つめ、その人をいつくしんで言われた」(21)とあります。この「いつくしんで」という言葉は、直訳すれば「愛して」という言葉です。イエス様は、彼のそのような生き方を喜ばれたのです。と同時に、彼のその真剣な求道に答えて、イエス様も本気で、真剣に彼を「永遠の命」に押し出そうとされたのです。それが問題の21節の言葉です。

私は、以前はこの箇所を次のように理解していました。「何をすれば—(律法をどう守れば)…」と語って来た彼の考え方の土俵の上に、イエスが一旦乗られて、その延長で「あなたには、まだ欠けたことがある、持ち物を全部売り払い、貧しい人々に分けてやりなさい」と言われたのではないか。結局、彼にはそれが出来ないわけですから、「それが出来ない」と見越しておられたイエス様が、わざとこのように厳しいことを言って、「何かをすること—(律法を守ることで)—永遠の命をつかみ取ろうとしても、出来ないのだよ。永遠の命は、信仰によって神から頂く以外にないのだよ」ということを教えようとされたのだ、と理解していました。確かにそういう面もあるのかも知れません。しかし今、少し違う理解をしています。イエス様は、真剣に「永遠の命」を求めた彼を、心から喜ばれました。そして21節のポイントは、「持ち物を全部売り払え」ということよりも、むしろ「わたしについて来なさい—(従って来なさい)」ということだと思います。先程「永遠の命」を頂くには、「イエス様を信じて、神の恵みに信頼して『神様…受け入れて下さい』と身を低くして神を見上げる」しかない申し上げましたが、それは言い換えれば「イエス様に従う—(従い続ける)」ということなのです。今は、私達がどこに居ようとも「聖霊としてのイエス様」に従うことが出来ます。霊的に従うことが出来ます。しかしこの時は、イエス様は肉体を取っておられましたから、本気になってイエス様に従おうとすれば、財産を売り払って、身軽になって、文字通りイエス様の後について行くしかないのです。だからイエス様は本気になって、彼を召された、弟子にしようとしたのだと思います。しかし、彼はその言葉に答えることが出来ませんでした。イエスはがっかりされたと思います。彼は、イエス様に信頼する

よりも、財産に信頼する方を取るのです。

23 節の言葉は、イエス様の悲しみの言葉だと思います。そして—(金持ちの男の姿を一般化して)—25 節で「金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通る方がもっと易しい」と語られます。その言葉に弟子達は驚きます。というのは、当時は「経済的に繁栄していることは、その人が神に愛されているしるしだ」と考えられていたからです。「富めば富むほど神の国—(永遠の命)—に近い」と思われていました。イエス様はその考え方をひっくり返された。それはイエス様が「人にはできないことですが…神にはできるのです」(27)と言っておられるように、結局「永遠の命」を受けること、それは、人間のいかなる業が保障することでもない、ただ神の業なのです。そのために人に出来ることと言えば、神に信頼し、自分自身を—(自分の人生を)—イエス様に賭けて行くことなのです。言葉を換えれば、日々イエス様に従って行くことなのです。29～30 節でイエス様は「そのために犠牲があるかも知れないけど、結局、それが人生の祝福の方法なのだ、そして『永遠の命に至る方法なのだ』と言われるのです。

2. 適用～「豊かな信仰生活への招きに応える」

この個所が私達にチャレンジすることは、「イエス様に従う」ということだと思います。「イエスに従う」とはどういうことでしょうか。

ここに登場した金持ちは、「ルカ福音書」の平行記事では「議員—(役人)」だったと記されています。彼にとって「生きて行く土台」は何だったのか。それは、おそらく富であり、議員—(役人)—という地位でした。彼は「富と地位」の上に自分の人生を作り上げていました。確かに誠実な人だったでしょう。神を求め、律法も守った。でも、やはり彼にとっては「富と地位」が人生の土台であり、「富と地位によって地上に縛り付けられていた」と言っても良いかも知れません。イエス様のチャレンジは「人生の土台を富や地位の上に置くのではなくて私の上に置きなさい」ということでした。「あなたを地上に縛り付けているものから自由になって、本当に私に従って来なさい。あなたの生きる土台を私の上に置きなさい。そのようにして永遠の命を目指しなさい。人生の土台を私の上に置かなければ永遠の命に至ることは出来ないのだよ」、そう語られたのではないのでしょうか。彼は人生の土台を「この世の富と地位」の上に置いたまま、その状態で永遠の命を手にいれようとしたのです。しかしそれは無理なのです。

「マタイ福音書」では、イエスは次のように言われます。「天の国は次のようにたとえられる。畑に宝が隠されている。見つけた人は、そのまま隠しておき、喜びながら帰り、持ち物をすっかり売り払って、その畑を買う。また、天の国は次のようにたとえられる。商人が良い真珠を探している。高価な真珠の一つ見つけると、出かけて行って持ち物をすっかり売り払い、それを買う」(マタイ 13:44～46)。「神の国に入るということは、『持ち物をすっかり売り払って』と表現されているように、それまでの生活が手放され、新しいものに専念するということ」、「生き方の方向転換」、その姿勢が必要であることを言うておられるのです。

しかし「人生の土台をイエス様の上に置く」、あるいは「生き方の方向転換をする」とは、具体的にはどういうことでしょうか。それと「持ち物をみな売り払い…そのうえで、わたしについて来なさい」(21)の御言葉と、どのように繋がるのでしょうか。

私は、私達に求められることも、聖フランシスコのように私達を地上に縛りつける危険のあるものから自由になることだと思います。もちろん、地上を生きて行くためには、ある程度の富は必要です。でも「富を最も大切な土台」とはしないのです。例えば「富は、この世でイエス様に従って生きるために、そのための必要を満たすために神から頂き、預かっているもの」と考えるのです。神から預かっているからこそ大切に考えなければならない。使う時にも感謝して大切に使うわけです。でもそこで大事なものは、富に魂を支配されない、最後の信頼はイエス様に置く、イエス様について行くことを第一にする、その思いだけはしっかりと持っておきたいと思うのです。羽鳥明先生がアメリカの神学

校で学んでおられた頃の話です。学費が高い、先生は、アルバイトに明け暮れていました。しかしある時、思いました。「私は、神に仕えるために学んでいるのに、やっていることと言えば、金儲けだけじゃないか」。それからアルバイトに使う時間を、神を伝えるために使うようにしました。収入は減りました。しかしある日、学校に授業料を納めに行くと「あなたの分の授業料はもう収められていますよ」と言われたのです。神様が喜ばれたのだと思います。富だけではありません。例えば、聖書学では、信仰がない方が学問的に深い研究が出来るそうです。学問ならば色々と疑って掛からなければならぬ。でも信仰があると、信仰に抵触するような疑いはしない。だからある人は、実際に上の人から「君も信仰を捨てた方が良い研究が出来るよ」と言われたそうです。学者としての名誉に関わることも知れませんが、でも、そこから自由になる。このようなことは、私達の回りには形を変えて色々とあるのではないのでしょうか。三浦綾子さんが朝日新聞の懸賞小説に応募するために「氷点」を書いていた時です。12月31日の締め切りに間に合わないかも知れないと思いました。そこでご主人の光世さんに「毎年、子供達を集めて盛大にやっているクリスマス集会を今年だけは中止して欲しい」と頼みました。光世さんは言われました。「神が喜び給うことをして落ちるような小説なら書かなくて良い」。凄い言葉だと思いますが、主に従うことにおいて、何事からも自由だったのではないのでしょうか。

なぜ、聖書は、それ程「イエス様に従う」ということを強調するのでしょうか。「信仰生活は、そんな安価なものではない」ということを教えるためではないのです。イエス様は、この個所の最後に、信仰生活の祝福を語っておられます。以前、水曜集会でお話を聞いていた中川健一先生が、こんな話をしておられました。まだ飛行機が一般的でなかった時代の話です。ある人が日本からアメリカに行こうとしました。お金が無かったので4等席のチケットを買って、食べ物も自分で、スルメとチーズとクラッカーを持ち込んでそれを食べました。食事の時間になるとレストランには美味しそうな食事が並ぶ。彼はそれを見ながらスルメをかじっていた。いよいよもうすぐアメリカに着くという時になって、彼はレストランのスタッフと出遭った。スタッフが聞きました。「あなたは食事の時間になると姿が見えなくなりましたが、どうしたのですか」。彼は言いました。「私は船に乗るので精一杯で食事代まで買えなかったのです」。スタッフはビックリして言いました。「あなたが買ったチケットには食事代まで入っていたのですよ」。先生は『「信仰生活を送る』ということと『豊かな信仰生活を送る』ということとは違う』という言葉を紹介されていました。私達に与えられている信仰生活は、本来もっと豊かなものなのではないのでしょうか。しかし私達は、もしかしたら「とりあえず天国に行ければ良い」という程度の信仰生活を送っているのかも知れません。しかし、本当の豊かさを味わうには、打ち込むことが必要なのではないのでしょうか。「人生の土台を変えて、イエス様に賭ける」、「イエス様に従うことを妨げるものに対して自由になる」、そのような信仰の姿勢が、私達に信仰を持つて生きることの本当の豊かさを味わわせるのではないのでしょうか。イエス様は、ただ「ついて来い」とは言われない。責任を持って私達を招かれます。イエス様に本当に従い、人生の土台を、最後の信頼を、イエス様の上に置き直して、主が与えようとしておられる豊かな信仰生活に与りたいと願います。